

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

平成の初め頃、こんな話を聞いた。ある人が息子の運転する車に同乗した時、靈柩車を見た途端に、ハンドルを握ったまま両手の親指を隠したので、理由を聞くと、親が早く死なないためといふ。その話を聞いた私は不思議に思い、同時に興味も抱いた。靈柩車を見ると験がよいと私は思っていたからだ。会う人ごとに「靈柩車と親指」について尋ね、知人にアンケート用紙を配り、事例を集めてみた。

その結果、明治生まれから昭和50年代生まれまで、100人ほどの回答が集まった。親指を隠す行為の元の形は、「葬式」を見て親指を隠す行為の元の形は、「葬式」を見ているが何もない人が29人、「験が悪い」という人が7人、「験がよい」のが19人だった。昭和世代が中心で、調べた人はまだ少なかつたが、聞いたことのある人まで含め

ると、6割の人が、靈柩車を見て親指を隠すことを行っていた。理由は親が早死にする、死に目に会えないのが大半だった。なかには救急車の音を聞いて親指を隠す、葬式に出くわしても親指を隠す人もいた。「験がよい」人も2割ほどいて、靈柩車に対する人々の反応は分裂していた。

不思議に思ったのは私はばかりではなかった。国立民族学博物館の『月刊みんぱく』の「読者のページ」で、この俗信について質問をした人がいたが、分からぬままだった。これを見た文化人類学者、高山純氏は「葬式に親指を隠す風習の起源」（『帝塚山論集』七七等の論文をまとめた。それによると「靈柩車」



宮形の靈柩車＝奈良市内で2000年、筆者撮影

靈柩車と親指

を見て親指を隠す行為の元の形は、「葬式」を見て親指を隠すというものが、何もない人が

どううという。その証拠として、来日したイエズス会宣教師ルイス・フロイスが1585(天正13)年にまとめた『日欧文化比較』の「ヨーロッパで

見て親指を隠すという習慣は、都会的なもので、靈柩車出現以後に発生した新しい習俗ではないかと推測している。靈柩車か

は主人が死ぬと従僕らは泣きながら墓まで送つていく。日本ではある者は腹を裂き、多数の者が指先を切りとつて、屍を焼く火の中に投げ込む。」

という一節も示した。

服喪儀礼で指を切断することがあったとしているところがある。それは服喪の儀礼の変形とすることには疑問も残る。奈良市田原では、鉈で会葬者の爪を切るまねをするというが、その方が指の切断の名残かと思わせるものがある。私は、靈柩車を見て親指を隠すという習慣は、靈柩車出現以後に発生した新しい習俗ではないかと推測している。靈柩車か

は、完結した一つの世界を有する共同体では、町でも村でもその構成員の死亡情報を、すぐに周知され、共有されるはずだ。野辺送りに遭遇して、親指を隠すことは考えにくいのではないか。多くの人々が集まり、住む都会では、見知らぬ者の死が、靈柩車という姿を伴って、不意に人の目に飛び込んでくる。親指を隠すという動作は、その時のとっさの防御策として始まったのではないだろうか。見かけなくなつた宮形の靈柩車は、大正4(1915)年に大阪で考案されたというが（井上章一『靈柩車の誕生』）、靈柩車の普及と葬列に対する人々の意識の変化も考えてみなければならぬだろう。（奈良民俗文化研究所代表）